

# 玉川周辺の歴史地理学的研究

## —とくに地域開発の構造分析とその方法—

桜 井 正 信

### (1)

玉川周辺地域の開発は他の武蔵野に比べ早い時代から開発されて、荒川沿岸の武蔵野と同じに、河川文化といえる古墳文化の開拓がすすめられている。古代社会を開拓しているムナサン、ムサンの両豪族は、四世紀には古墳文化を育て、多摩川台、野尾、善多見、和泉100塚など、対岸の日吉台、とともに古墳群の遺物をのこしている。勿論このような社会を成長させる基礎にはそれより以前の縄文時代の遺蹟も、この地区には多く、なお生活資料を獲保したしるしの貝塚も発見されている。そのご大和朝廷の東進による屯倉化から国家機能にくみいれられて、玉川の中心府中に武蔵の国府がおかれ、ここを中心に武蔵野が開発され、玉川沿いから武蔵野内部に開拓されている。奈良朝後、平安期をへて、鎌倉に入り、各地の豪族がこの地に起り、武蔵野武士団の実力者は、荒川地区の河川文化を利用して起った、武士団とともに、中世社会を興した。ことに鎌倉幕府が箱根をこへた東国の鎌倉におかれると、武蔵野の南は北からの交通路もこの地を通り、相州道や中山道（江戸以前の道）も開かれ、平家一族の江戸氏などの子孫もこの地区で領有地をもつなどして、武士文化を育てた。そのご室町期には、足利氏とその支族がこの地を領している。足利氏のあとは両上杉家と北条氏となり、やがて徳川が江戸に入部して、封建社会を完成させる。歴史の背景は、玉川周辺においては、大体同じである。

ここで研究の領域を、玉川周辺ということから、現行の行政を主体にみて、いちおう世田谷区に限ってみることにする。玉川に接した世田谷は、多摩川下流の沖積地でそれに段丘と台地からなりその台地内は、他の武蔵野と同じ地形をしめし、いくたの湧水、古延長川などあって、自然環境は多様である。このような観点から、多摩川周辺の問題をとらえる立場から村落開発の歴史的過程と地域的な問題をさぐり、ここに玉川周辺の特色をみようと思う。ことにこの地は、江戸氏が江戸城から、この地喜多見に移ったことや、中世に力をもった世田谷吉良が、徳川氏に解体され、城下町形成が未成熟のまま、家臣団を分解させたために、農村上級者がその武士達によって構成されるという。他の武蔵野に例をみない、村落開発の姿がみられる。そこで近世的な郷村制確立がひかく的強力につくられしかも、古集落を核として、新しい村が生れている。

このような観点から村落開発、村落集団の基礎構造を知るために、供養塔、道標など古道と集落を結ぶ資料をみつめ、ここから自然村の開発とその生態をつかもうとした。それ以前のは板碑からであるが、板碑の存在と村落指導者の位置づけは、この地区で村落開発の資料とするのは、採集数が少いことと、江戸時代にほとんど破かいされて、不可能であるから、供養塔ほかの建碑を主

体に論をすすめることにした。

(2)

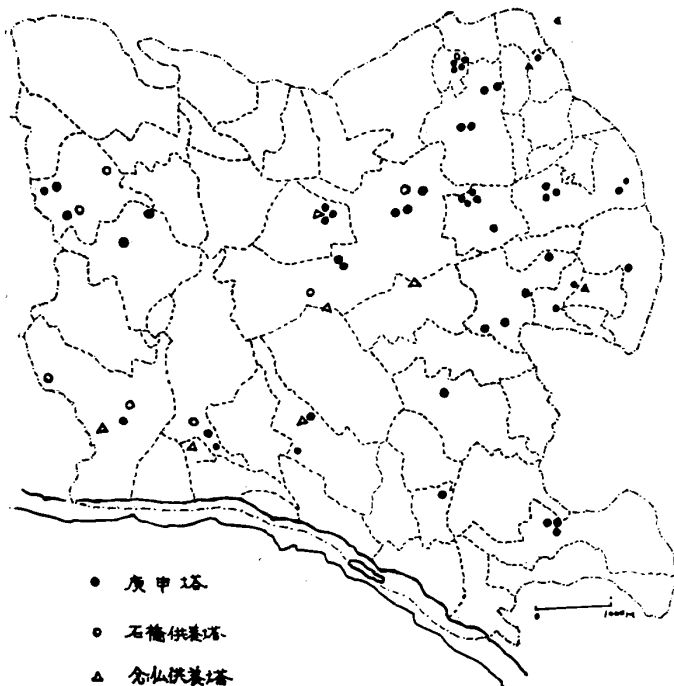
ここで研究調査の地域区分は、現在の行政区に分けて、はじめ、特に、歴史のある町(世田谷町)などは注意しながら分布の様相と、かつての自然材のあり方とを考えながら、研究地域の正確なデータを集めることに留意した。ただし、居住地化した世田谷の東半分の地区の建塔の位置づけには疑問の所もある。

調査地域の北限、北多摩郡と接している烏山地区は、甲州街道で区切り、それより南の世田谷区内全域を研究対象とした。これは旧烏山町は文化圏から見ると次期の調査地区の北多摩郡と同一系にみられるので、あらためてこれら地区の調査にあたることとして除外した。東は目黒川を境とした現在の世田谷区の境域内を、南は、これまた現在の行成区内にとどめ、隣接、祐天寺、碑文谷、柿の木坂の如く、吉良時代に世田谷郷と云われた地域や、江戸時代に関係あった村々も、又の期にゆづって調査地域の対象から除外した。西は玉川の流れを境にした現在の行政区をとった。

調査の地域の小区分も、現在の町単位にとり、比較的広い町は丁目単位にした。現在の町が必ずしも古い村を現わしてはいないが、都市の中にこうして編制替えされた町のなかにも、かつての自然材が基になっていると思われる所は、そのまま町単位に、そうでなく、他の町に編入された村は歴史時代にもどすなど調査上、並びに、分布図作成の上で、調整した。例えば、世田谷村から出村として生長した飛羽根木(現在代田二丁目になっている)のような所は、飛羽根木という自然材をもとにして、親村(古い村)と新しい開発村の形態を、はっきりさせて、形式的な町単位の調査をできるだけ補って、調査の完全を期した。

(3)

第1図 世田谷地方の供養塔分布図

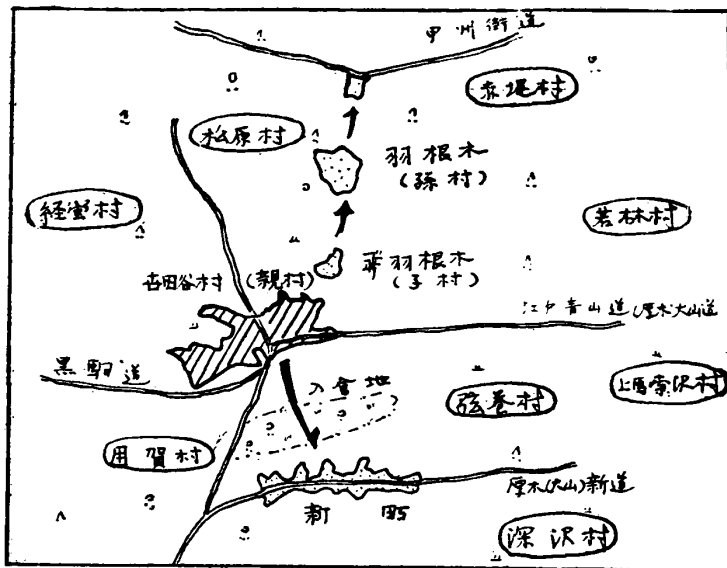


庚申供養塔の調査されたものは、第1図の分布図に見える55基で古くは寛文10年(船型)から文政9年(方形)のものがみられる。分布は調査地域の東半ことに居住地区にほとんど見られないのに反し、西半は各々町に見られる。これは都市化の影響で、商店街地区、居住地区となり、必然的なものである。西半が交通の要点以外では未だ宅地化が充分でないので、なお塔の残存をゆるしている。また本調査が路傍の建碑を主としたことから大正の震災以後の交通路の改修や昭和2年以後の

耕地整理や東京オリンピックの関連道路で拡幅されて、供養塔が寺社に移転合祀されているのがある。(例えば太子堂、円泉寺境内) 分布の濃淡を以て、かつての村落内の組織や生活態度をそのまま受取るわけにはいかないが、大体において分布している場所の数は、永い伝統の中に成長した生活共同体としての部落集団と一ちすると見ることが出来る。〈5〉

比の地方の分布の特長として、古くからあった集落の外縁部と、これからの歴史のある村落から離れた地区に塔の分布をみている。また、古い村が開発した新田などの土地には塔の分布度は稀い。世田谷村と飛羽根木村(本村と新田)の関後や、奥沢村と奥沢新田の場合の如きはその部類に入る。これは生活の場所として新開地が充分生長せず常に母村の生活機能のもとに置かれているからである。特に信仰生活には、古くからの母村の寺社に依存して、母村を通じたそれぞれの講に包括されて生活していたからである。

第2図 世田谷飛地図



以上は第1表の報告済の供養塔の分類表から眺められた問題であるし、祠と講の調査からも云える。この表から作図したのが第1図の塔の分布図である。

第1図によって供養塔の分布形態が各村落別に明らかにになったが、塔の祭置場所は、一体どうなっているか、これによって、村落の位置や他村との境界も明らかになる。ことに祭置場所は古道路

第1表 世田谷地方庚申供養塔生態分数表

建塔年	年号	所在地	形状	飾	世話人名	備考
1	寛文10年 1670	野沢1-53	船型		施主11名	
2	寛文11年 1671	羽根木1709	船型	三猿		奉寄進庚申
3	寛文12年 1672	太子堂35	円筒型			
4	延宝7年 1679	世田谷 5-284	船型	青面金剛 依		
5	延宝8年 1680	三軒茶屋226	船型	青面金剛 猿	菊田孫左衛門 外12名	
6		池尻町109			田中三左衛門 外8名	
7		奥沢1の3の91 (浄真寺内)		文字にて 奉寄進 庚申供養	白井五左衛門 広林 森辺源太郎	武州藤原郡江戸八丁 堀四丁目 三輪文助 内方 山崎勘右衛門
8	延宝9年 1661	太子堂35	船型	青面金剛 三		
9		石林町128		唯藏三猿	北村安左衛門 外8名	奉供進庚申石塔
10	天和元年 1681	羽根木1709	方角	青金、三猿		
11	貞享元年 1684	宝川町 1-683	船型	青面金剛 三猿		野良田村 安左衛門 外8名 金剛寺境内
12	貞享2年 1685	代田教会入口				広田忠記 外8名
13	貞享14年 (貞享15 年まで)	羽根木上1709				空良兵衛 外11名 奉納庚申供養
14	貞享 年	上馬1-546		青面金剛		
15	元禄4年	北沢3-342	船型			
16	元禄3年 1690	藤田町飛地 104北	方角	青金		右 奉進立庚申 左 武州多摩郡世田 谷境内藤田村
17	元禄5年 1692	池尻町109	船型	青面金剛 猿		武州地蔵村 奉供進庚申
18		北沢4-573		青面金剛		祠中にあり 奉供進庚申
19	元禄7年 1694	藤田町 藤原寺入口左 側	方角	青金		中村金右衛門 外5名 在京都藤田村
20		下馬2-20	船型	青面金剛 猿		祠中にあり
21	元禄8年 1695	野沢2-111				野沢村 福徳神社の中
22		上馬3-957				

の分岐点及び曲折部が主で、集落の入口に多く祭られている。このほか寺内や寺社の大門前に置かれている。寺社内や門前の塔はほとんど、同一部落内の塔の移転で、道路改修と居住地区の拡張で移されたものであって、かつて小部落を代表した建碑が都市化によって、このように祭置場所を替えている。

祭置場所は古道路の分岐点がほとんどで調査の63%をしめている。

これに次いで寺院境内と神社に祭られている。このほか村の境界地(下馬と野沢の村界)や、村落の由緒のある処に講組織の出来たことを記念して建てたもの、(24)や村落の成立を記念して、部落の中心に建碑した(21)ものなど、村落内の霊地というような場所に建て、部落人の地縁的な結合をはかっている。

23	元禄12年 1699	相師ヶ谷 1-1019	船型	三猿		
24	宝永3年 1706	岩根木1908	舟型	背面金剛 左右蓮花		
25	宝永5年 1708	世田谷 2-1330	舟型	背面金剛	宇田川	庚申願結茶 早田川文右衛門外 同姓11名
26	宝永6年 1709	代田 629	舟型	背面金剛		現当□□□□ 奉供養宝永六
27	正徳元年 1711	世田谷 3-2399	舟型	〃		岸外敷名
28	正徳3年 1713	世田谷 5-2984	舟型	〃		世話人4名
29	正徳4年 1714	上馬3-118	舟型	〃		庚申供養塔
30	享保4年 1719	上馬3-1007	舟型	〃		
31	享保19年 1734	世田谷4-6148	舟型	背面金剛	世話人14名	瀬田ヶ谷村
32	元文4年 1739	世田谷 5-2984	舟型	〃		世田谷横根村
33	寛保元年 1741	若林 658	舟型	〃	建立者 祝摩玉次郎	岡中にあり
34	〃	若林 638	舟型	〃	世話人 井上久兵衛 外1名	
35	寛保2年 1742	三軒茶屋226	舟型	〃		岡中にあり
36	宝暦14年 1764	若林 638	舟型	〃		
37	〃	若林 637	舟型	〃	根岩氏所 外3名	
38	安永丙申 年(5) 1770	瀬田 628	舟型	〃		世田谷鎮瀬田村
39	安永6年 1777	世田谷 5-2984	舟型	〃		右に武州産原瀬田 谷村 撰帳7名
40	安永8年 1779	世田谷 4-479	舟型	〃	願主 四心	東青山道二道半余 岸道四里 南大山道三子川一里 余北四谷道二里半余

41	天明元年 1781	喜多見3-31	舟型	背面金剛		当村中南山道 東江戸へ 西府中
42	天明7年 1787	用賀3-958	舟型	〃		
43	寛政3年 1791	相師ヶ谷 1-1245	舟型	〃	願主石井一?	東江戸青山(巨無) 北上高井戸西府中 多摩郡下相谷ヶ谷村 以前の地は現在地より 南方5米
44	寛政6年 1794	太子堂72	舟型	〃		新田毛利佐七外14 池上 名の名あり 九息道
45	寛政10年 1798	奥沢3-916 (浄真寺内)	舟型	背面金剛		右 北高井戸道西府 中道 用二子道 正面世田ヶ谷
46	享保2年 1802	相師ヶ谷 2-682	舟型	文字にて 庚申塔		
47	文化8年 1811	奥沢3-916 (浄真寺内)	舟型	〃	願中12人	九品仏道
48	文化7年 1810	大蔵町259	舟型	〃		
49	文化9年 1812	相師ヶ谷 1-442	舟型	文字にて 庚申塔 三猿		東たかいどもち北と ころざわみち雨せた かやみち新宿道分石 工真儀
50	文化11年 1814	相師ヶ谷 1-939	舟型	〃		上相師谷
51	〃		舟型	背面金剛	島田嘉兵衛	八幡山村
52	文化15年 1818	上馬3-980	舟型	背面金剛		上馬引次口村中
53	文政2年 1819	奥沢3-41	舟型	背面金剛		あわしま道 深沢不動のところ
54	文政9年 1826	藤堂町37	舟型	〃		府中道 玉川
55	慶応3年 1867	藤堂町185	舟型	背面金剛		

此の調査地域が大山へ通ずる場所に当たっているの、祭置場所が交通の要所に建碑されている。天明以後のものは(40)ほとんど次の宿駅や有名な地方名と里程を記入して道標の役割をなしている。いずれも祭置場所を中心に東西南北の地名と、およそ道程を塔の両側に刻んでいる。こうして見ると庚申塔の時代的な祭置場所の変化も考えられ、江戸時代初期のものから中期までは、村落の開発に関係したものが多く、(寛文-天明)、安永以後は次第に村落が交通路に面して道標をかねたものとなり、祭置の場所も、道路の分岐点に置かれるようになっていく。村落の安定からこうして、他村、他地方との交際期に入っていく、東江戸青山、西府中、南多摩郡下祖師谷、北上高井戸などと明記した碑面をもつようになる。(43)江戸地廻り圏の近世郷村制が確立される型が、こうした建碑の祭置場所からも見られる。

調査地域の南の喜多見、宇奈根、大蔵、野毛などの多摩川の段丘下の川沿いで永らく草地であった土地は、開発が著しく遅れているので庚申の祭置場所は見当たらないが、段丘上の開発に村方三役をはじめ、本百姓が努力して新畑を作りあげた地域には、丘陵にそって分布されている。しかし、ここでも、本村との関係の強い新田や新田の地域にはその様な祭置も少い。奥沢の本村と奥沢新田の関係はこれを如実に物語っている。

(5)

ここで庚申答供養の建立をみると、調査をしたものなかで、建立年代の古いものは、塔建立にあたった世話人が銘記されている。ことに寛文から貞享までの舟型の建碑に対する村落共同の熱意が見られ、これは同時に、村落の開発が、部落構成の相互の力によって強力になされ近世郷村を成長させていく、部落指導者層の象ちようでもあった。

元禄の時代に入ると5基が数えられ方型、方型有笠と舟型があり4.5名の名が建碑に記入されている。この時代には、近世の村落が確立され、古い聚落から新しい村を拓いた人達も一応の部落人となり、富農層が頭を出しはじめた(6)段階の建碑である。この年代は池尻村、代田村、喜多見村などの諸知行地が、開発が終るにつれて、天領に編入される時期であって産業の指数も漸次上昇していった時期の建碑であって、そうした時期の富農層が建立した記念碑であった。

安永及び天明の期に入ると5基の方型建碑が道標を兼ね形状も細長くなり大山への里程を付した

建碑がなされ、江戸近郊がの性格が出はじめ、村落（部落）も信仰中心に固まり、村の位置づけのためと村落共同の意識を示すために、このような形をとって供養塔に表わしている。武州在原郡世田谷村横根(39)、同荏原郡世田谷領瀬田村(38)などの村名が刻まれている。このごろの供養塔は庚申に限らず、念仏供養型の場合も同じである。

降って寛政か文化に入ると供養塔の形態上の変化が著しくなり、町の時代迄続いた三猿像が消えて、庚申供養という文字碑になっていく、建碑も小さく、笠もない単純なものとなっている。この頃は村落の集団が供養塔の路ぼうの祭祀を形式化して、村落の謂行事に重点を置いて、庚申信仰の中心、または、村落の結合が外の開発でなく、内的に進んで行った。この頃は村開発のゆきずまりからきた経済上の困難なことが、こうした建碑に表われている。

供養塔の末期的な形が出てくることは、比の地方の開発も停滞し、江戸近郊村のゆきずまりに苦しんでいた時期であったからである。

## (6)

このように供養塔の建碑の生態的な面が、各時代によって機能的にも、諸々に変っている。これはそれを支える部落の地理的な位置と時代的な変化によるものであって、塔を建立させる時の影響である。

調査の結果からみると、時期的に塔の建立のない部落は、世田谷村の中心部や奥沢の本村のごとく、特定の社寺の信仰圏に包括された地域で、供養塔などを建てて、村落の標示や、開発地域の境界、ないしは、村の霊地建碑を祭置する必要がなかったためである。また、この様な中世期からこの地方開発に、中心的な役割をした、指導的な村落である村の分村は血縁的に強力につながれという時代に於とは、母村と同じく、親村の社寺の信仰圏内で生活し、村落集団の宗教集団も伝統の信仰につながって、その線の上に新田なり、新畑を開拓している。世田谷村が万治元年開拓した新町のごとく比のような事情をよく示すものである<sup>(7)</sup>。また古い村落の母村から子村として、分れ、それが更に地縁的に延びて孫村というように生長しとっている。第2図に示すように世田谷村から飛羽根木（子）羽根木（孫）と分かれた部落の供養塔の建碑は、これをよく明にしている。飛羽根木に建碑がはなれないのに羽根木には供養塔を建立させている。一方、本村と子村との関係のない独自で近世の郷村制確立に向って開している古い村を取囲む部落は、開発の終息や新村成立の記念碑として、部落共同の象徴に供養塔を建てしいる。例えば、野沢村の如く正保より大森その他の地区から入ってきた百姓の開墾が進められ元禄八年に検地が行なわれて、村落が固定化した、比の時からこの地方を野沢村と定め、村の中心地に庚申供養塔を建てしいる<sup>(8)</sup>。開発地の基そが確定されると庚申供養した一例である。このように調査地域は生態的に吉良家臣団の郷土化したような土地や北条の家臣の開拓した世田谷村、経堂在家村、北沢村等の古い村を核としてその外縁部が開発され近世郷村制が次に確立され、元禄期にその一段落を見ているが、これが供養塔の建碑にも現われている<sup>(9)</sup>。そうして、これらの村落は屋敷神の祠を信仰の対象にするか、自己の部落神や寺院の信仰圏に強くつつまれて、庚申のような俗信を生長させる要素がなかった。これが次に周囲の部落から古

い村に時期的に遅れて祭置されるようになっているのは、庚申が信仰の機能ばかりでなく道標や村落の位置づけに祭置される時期になってからあって、開発村落の場合の建碑とは著しい観念上の相違がある。そのため古い村など庚申塔の建碑はおくれている。

(7)

供養塔、ことに庚申供養塔の建碑の分布、祭置所、建立期、及び形態の変化などを調査区域内の地域開発を近世の村開発に重点を置いて考察してきた。世田谷地方が、中世の郷村制を確立する過程で、江戸幕府の政権下に編入された地方であり、世田谷郷の古い部落は、その後の此の地方開発の原動力となって、りん接の村落の生長を助けいる。後北条の家臣や世田谷吉良の家臣の郷土化して土着したような地域のりん接地区が次に近世郷村制立に進んで行く過程も庚申の建碑によって明らかになった。

このように、古村(世田谷、太子堂、北沢、奥沢)を取囲んだ村々は、近世の初め、ど農を本百姓に育てつつ近世郷村制の確立に向って開発を続け、若い組織を以て、此の地方を開発し、元禄期には、代田村をはじめ三宿村など、近世村落構成を充実させ、自立の農業経営をするようになり、富農層も現われはじめている。このように古村を取囲む地域開発の生長も供養塔の建碑で明らかになっている。

また古村の飛地が、近世郷村制の確立された地域に接している場合は、本村と距離的な制約、血縁の度合などによって一応には断定出来ないにしろ、古村の枝村の如きはほとんど親村の信仰圏に支えられて、独立の信仰を形成せずにいるが、二次的に飛地して孫村のよう血縁的にも、うすれた地域には、本村との信仰も離れ、独自の信仰を形成させ開発にちなんだ建碑を、村の中心部や他村の境界地、主要路の分岐点に建ている。しかもこのよう建碑を、子村、親村へと逆に移入させる媒介をしている。この点古村の建碑は時代が新しく、供養塔、講信仰の機能からはずれた道標を兼ねた時期に祭置されている。

このように古村を取囲む近世の村々の配列の条件が世田谷地方村落開発の特色であり、これが建碑などの村落の共同事業にまで影響している。

近世の郷村制が建立され、江戸との経済上の関係も密になるにつれ村落の開発も、一応の段階に至ると供養塔の道標化が進み、自己の村落を位置づける他、大山や堀の内などの道案内を兼ねるといふ此の地方特有のものとなり、祭置場所も村落の開発期とは異った路傍を主とした所に建てられるさらに時代が下ると建碑は文字碑となって、方型の小さなものとなっている。このように時代的な変化がそのまま建碑に現われ、機能的にも変ってゆく供養塔の形態は、今迄報告された地方<sup>(10)</sup>にはその類を見ないのは、世田谷地方が中世から近世の開発、更に江戸近郊村としての急速な発展のかたちが古い村を核とし、次々に新しい地区を開いていく特色があらわれたもので世田谷地方文化のもつ一つの性格が、こうした開発と供養塔の建碑によってもうかがわれる。

この研究は昭和39年の文部省科学研究費の助成を得た「玉川周辺の歴史地理的研究」一特に地域開発と構造分析とその方法一の一部をなすものである。

## 参考文献

- (1) 渡辺一郎(1952) 世田谷新宿楽市設置の史的意義 (世田谷復刊1号6頁—11頁)
- (2) 児玉幸多(1951) 近世日本農村生活史 (吉川弘文館96頁)
- (3) 信濃教育会  
東筑摩部会編 (1943) 農村信仰誌 一庚申念仏備一を参考にしと作成した (六人社)
- (4) 堀一郎(1951) 民間信仰 (岩波 100頁—101頁)
- (5) 信濃教育会  
東筑摩部会編 (1943) 農村信仰誌 (六人社 6頁)
- (6) 木村礎(1952) 元禄八年井伊領田谷に於ける人口構成及び下人の問題 (世田谷復刊1号1頁—15頁)
- (7) 新編武風土記稿, 卷48荏原郡110世田谷村新田村ノ頁 (雄山閣)
- (8) 佐久本武雄(1955) 世田谷区勢要概 (世田谷区勢調査会 52頁)
- (9) 世田谷区役所(1962) 世田谷区史上卷 (世田谷区区役所 1375頁)
- (10) 信濃教育会  
東筑摩部会編 (1943) 農村信仰誌 一庚申念仏編一